

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19330116

研究課題名（和文） 戦争の記憶の創出と変容
—地域社会における戦争死者慰霊祭祀の変遷と現状—

研究課題名（英文） “The Making and Transformation of the Memory of Wars: Changes and the Present State of Memorial Services for ‘the Deceased in Wars’ in Local Community”

研究代表者

清水 克行 (SHIMIZU KATSUYUKI)

明治大学・商学部・准教授

研究者番号：40440135

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域共同体における戦争死者慰霊祭祀の歴史と現状を解明し、戦後60年の社会変化によって引き起こされつつある、戦争死者慰霊祭祀施設の性格と意味づけの変化について検討することを目的とする。具体的には、(A) 戦後建立された戦争死者慰霊祭祀施設の諸相、(B) 戦争死者慰霊祭祀の歴史的変遷、(C) 戦争死者慰霊祭祀と無縁慰霊祭祀との比較検討、の3点について分析を行い、戦争死者慰霊祭祀の地域性、歴史性、民俗伝統とのかかわりを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to shed light on the history and the present state of memorial services for “the deceased in wars” in local communities, and examine the changes in the features and meaning of memorial facilities for the war deceased, gradually caused by social changes during the 60 years since the end of World War II.

We have particularly conducted an analysis from three perspectives: (a) aspects of memorial facilities for the deceased in wars established after WWII, (b) historical transformation in memorial services for the deceased in wars, (c) comparative study between memorial services for the deceased in wars and those for the dead without any surviving relatives; based on which, we have revealed the regionality, the historicity, and the relevance to folk tradition, of memorial services for the war deceased.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	8,400,000	2,520,000	10,920,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：死者、慰霊、祭祀、平和祈念、戦争

1. 研究開始当初の背景

従来の日本の慰霊祭祀は靖国神社問題を中心に論じられてきたが、批判されることが多い天皇の臣下のみを祭祀対象とすることについても、その歴史的成立過程の検証はなされてこなかった。また、現在、都道府県の記念碑や平和の礎などがある沖縄文仁の丘も、もともとは個人や一地域からの慰霊の運動がその端緒となっている。戦争死者の慰霊は、もともと地域自発で多様なものであり、現在も置かれた状況の変化により意味づけを変えつつある。戦後 60 年の時間経過のなかで、総じて現代日本社会の戦争死者（兵士・非戦闘員を問わず、戦争によって生じた死者全般）に対する慰霊祭祀の実態および歴史認識は、国民的共通認識を欠いたまま、大きな混迷のなかにあるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、地域共同体における戦争死者慰霊祭祀の歴史と現状を解明し、戦後 60 年の社会変化によって引き起こされつつある、戦争死者慰霊祭祀施設の性格と意味づけの変化について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(A) 戦後建立された戦争死者慰霊祭祀施設の諸相、(B) 戦争死者慰霊祭祀の歴史的変遷、(C) 戦争死者慰霊祭祀と無縁慰霊祭祀との比較検討、の 3 点について分析を行い、従来、あまり言及されることのなかった戦争死者慰霊祭祀の①地域性、②歴史性、③民俗伝統とのかかわりを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 2007 年度の成果

2007 年度は、同 8 月に大正大学において第 1 回研究協議会を実施し、研究分担者間の情報交換を行うとともに、各分野の担当者を定め、各自調査研究を行うことを確認した。

上記課題の (A) を担当した孝本は、宮崎県および長野県の戦争死者慰霊施設の歴史的な変化について調査を行い、施設関係者からの聞き取りを行った。非戦闘員の戦争死者を担当する村上は、10 月に兵庫県姫路市で行われた太平洋戦全国空爆犠牲者追悼平和祈念式の参与観察調査を行うとともに、全国戦災都市連盟関連の資料を収集した。

(B) を担当する森は、福島県伊達市月館（旧下手渡藩）の「大位牌」についての資料収集をすすめ、下手渡藩の出自地である九州地域（福岡県）において調査を行った。また江戸期の戦争死者慰霊についての調査を、湊川神社（兵庫県神戸市）、高野山奥の院（和歌山県）、清涼寺（滋賀県彦根市）で行った。室町～戦国期の民衆社会での戦争死者慰霊祭祀を担当した清水は、刊行史料集を中心にデータ収集作業を行った。

(C) として、民俗社会における不慮の死者のための慰霊施設についての調査を担当する土居は、兵庫県神戸市にある行路死亡人慰霊施設、東塚についての調査、資料収集をすすめた。

2008 年 2 月には、分担者全員で鹿児島大学において研究発表会を行うとともに、西南戦争での戦争死者の慰霊施設の調査を行った。

(2) 2008 年度の成果

2008 年 6 月に明治大学において研究協議会を行い、情報交換を行うとともに、各分野担当者からの研究報告が行われ、昨年度に引き続き各自調査研究を行うことを確認した。

(A) の戦闘員死者慰霊祭祀を担当する孝本は、宮崎県および長野県の戦争死者慰霊施設の歴史的な変化についての資料収集、施設関係者からの聞き取り調査を継続した。非戦闘員の戦争死者を担当する村上は、全国戦災都市連盟関連の資料収集を継続した。

(B) を担当する森は、福島県伊達市（旧下手渡藩）の「大位牌」関係の資料収集を継

続した。清水は、中世末期～近世初頭に行われた鉄火裁判（焼けた鉄を握って村落間紛争の勝敗を決める神判）の犠牲者がどのように地域で祭祀・顕彰されているかを確認するため、滋賀県日野町・茨城県つくばみらい市・栃木県下野市などで調査を実施した。

（C）として、民俗社会における不慮の死者のための慰霊施設についての調査を担当する土居は、沖縄県における戦争死者遺骨収集活動についての調査、資料収集を進めた。

2008年12月には分担者全員で、高野山奥の院（和歌山県）にある戦争死者慰霊施設の調査を行うとともに、各自の研究内容について情報交換を行った。また、2009年度の日本宗教学会でのパネル報告の準備のため、発表内容の検討、役割分担を決める研究協議会を、2009年3月、明治大学において行った。

（3）2009年度の成果

2009年度は本研究の最終年度であるため、これまでの研究の総括として、2009年9月12日の日本宗教学会第68回学術大会（京都大学）において、本研究のメンバーによるパネル報告を実施した。当日は村上興匡の司会のもと、清水克行が「近世農村における慰霊顕彰」、森謙二が「近世武士社会における慰霊顕彰」、栗津賢太が「沖縄における遺骨収集の展開と慰霊顕彰」と題する個別報告を行い、それら三報告に対して土居浩がコメントを発表した。

3年間にわたる共同研究で日本社会の戦争死者の慰霊をめぐる多様な現状と歴史的来歴が、かなりの程度明らかになったことが、このパネル報告でアピールすることができた。パネル報告の概要は、日本宗教学会『宗教研究』第363号（2010年3月）に掲載されている。

なお、パネル報告の直後の9月、本研究の研究代表者であった孝本貢が急逝するという痛恨事があったことも付記せねばならない。研究代表者は、孝本の同僚であり本研究の分担者であり、本研究の内容を最も熟知し

ていた清水に速やかに引き継がれ、研究自体も最終年度を迎え総括を残すのみであったため、大きな混乱は生じなかった。また、研究分担者相互のあいだでも、パネル報告の準備過程や事後の反省会において、新たな課題や問題意識を確認することができた。今後、科研終了後も、孝本の遺志を継ぎ、新たな課題まで視野に収めながら、ここで得られた研究成果をさらに発展させてゆきたいと念じている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ①孝本貢、「戦後地域社会における戦争死者慰霊祭祀—慰霊碑等の建立・祭祀についての事例研究—」、『明治大学人文科学研究紀要』、査読無、64、2009、pp. 2-13
- ②土居浩、「遺骨との出会いを問わず—沖縄遺骨収集奉仕と金光教の信心—」、『宗教研究』、査読無、359、2009、pp. 165-166
- ③清水克行、「室町殿権力と広域逃散」、『歴史学研究』、査読有、852、2009、pp. 32-40
- ④土居浩、「仏教民俗学と近代仏教研究のあいだ—五来重に焦点を当てて—」、『季刊日本思想史』、査読無、75、2009、pp. 93-112
- ⑤土居浩、「墓を巡る人々の系譜—『掃苔』同人とその時代1—」、『SOGI』、査読無、104（18-2）、2008、pp. 64-67

〔学会発表〕（計10件）

- ①土居浩、「検証／顕彰される来歴—墓地の近代をめぐる—」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月13日、京都大学
- ②森謙二、「近世武士社会における慰霊顕彰」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学
- ③清水克行、「近世農村における慰霊顕彰」、日本宗教学会第68回学術大会、2009年9月12日、京都大学

- ④土居浩、「掃苔」の総体を相対化するーリサーチ・エンタテイメントの前哨ー」、人文地理学会第 116 回歴史地理研究部会、2009 年 9 月 11 日、さらさ西陣
- ⑤清水克行、「湯起請をめぐる室町人の意識」、法制史学会第 61 回総会、2009 年 4 月 18 日、九州大学
- ⑥土居浩、「遺骨と環境（問題）」、環境／文化研究会、2008 年 11 月 30 日、東洋大学
- ⑦孝本貢、「戦後地域社会における戦死者慰霊祭祀ー慰霊塔等の建立・祭祀についての事例研究ー」、「宗教と社会」学会、2008 年 6 月 14 日、南山大学
- ⑧孝本貢、「近・現代日本社会における葬送文化ー火葬・墓に焦点を置いてー」、日韓葬送文化研究会、2008 年 5 月 30 日、ソウル
- ⑨土居浩、「夢野東塚覚」、日本民俗学会、2007 年 10 月 6 日、大谷大学
- ⑩土居浩、「〈仏教〉実践の言説化ー「葬式仏教」論と葬祭研究を軸にー」、日本宗教学会、2007 年 9 月 16 日、立正大学

〔図書〕（計 5 件）

- ①清水克行、鈴木秀光、他 29 名、慈学社、『若手論文集 法の流通』、2009、pp. 339-360
- ②清水克行、蔵持重裕、他 13 名、岩田書院、『中世の紛争と地域社会』、2009、pp. 69-91
- ③清水克行、佐藤和彦、他 23 名、新人物往来社、『足利尊氏のすべて』、2008、pp. 125-142
- ④清水克行、吉川弘文館、『大飢饉、室町社会を襲う！』、2008、pp. 215
- ⑤清水克行、松永和浩、他 12 名、思文閣出版、『室町・戦国期研究を読みなおす』、2007、pp. 208-238

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 克行 (SHIMIZU KATSUYUKI)
 明治大学・商学部・准教授
 研究者番号：40440135

(2) 研究分担者

森 謙二 (MORI KENJI)
 茨城キリスト教大学・文学部・教授
 研究者番号：90113282

村上興匡 (MURAKAMI KOKYO)
 大正大学・人間学部・准教授
 研究者番号：40292742

土居 浩 (DOI HIROSHI)
 ものつくり大学・技能工芸学部・准教授
 研究者番号：20337687

※2009 年 9 月、研究代表者 孝本貢の死去により、研究分担者であった 清水克行へ研究代表者の変更。

(3) 連携研究者

()

研究者番号：